

港北区災害ボランティア連絡会ニュース

事務局 〒222-0032 横浜市港北区大豆戸13-1 吉田ビル206 港北区社会福祉協議会

TEL 045-547-2324 FAX 045-531-9561

HP <http://kouhoku-saibora.jimdo.com> FB 港北区災害ボランティア連絡会

第67号

2018年8月



* 入会は随時受け付けています。あなたの町の防災度を高めるためにお力を貸してください

災害時をイメージできる訓練を提案

港北小学校・拠点訓練に参加して

2018年6月9日に実施された、港北小学校・拠点訓練に参加しました。港北小学校の生徒も参加したこともあり、非常に多くの参加者でした。今回は災ボラがどのような活動をするのかを見せて欲しいとの斉藤会長からの依頼に基づくもので、計画をすり合わせる時間も確保できた訓練でした。おかげで、ボランティア受付（町内会からボランティア役を出して下さった）、ボランティア活動（段ボールベッド、紙食器の製作、会のチラシとニュース配布の広報活動）、災害時の避難所の様子の写真や防災パネルの展示といった多様な内容で参加できました。

発災時に避難所は大勢の人であふれる可能性があります。そこでの秩序作りはとても大変だと聞きます。拠点訓練は地域住民が「お客様」として参加するのではなく、いかに災害時の実相を知る内容のプログラムを提示できるかに掛かっています。今回の経験をもとにより役立つプログラムを提示できるよう全員で討論して行きましょう。

中島さんのレポートです。

新聞紙による紙皿とスリッパの作り方を指導しましたが、生徒や参加者のあまりの「反応の良さ」に少し驚きました。「食器持って避難できないですよ」と話すと、避難の時の自分の姿を想像していただくことができたように思います。また、6年生の生徒たちが本当に熱心に作成に取り組んでくれたのが、印象的でした。

反面「へえ」と感じたのが、港北区の防災マップをみて「これなんの地図ですか？」「この記号なんですか？」とお聞きになる方の多かった

ことです。多分「防災マップ」自体はご覧になったことがあるはずなのですが、普通に「地図」としてしかみておらず、地図の持つ本来の役割に気づかず、どこか



ペットボトルの箱で段ボールベッド作り早速試してみた



にしまいこんでしまわれているのだらうと思いました。

防災マップも防災アプリも、作るだけでは役に立たず、どれだけ「知らしめる」ことができるのか。改めてその難しさを感じた1日でもありました。

(中島一郎)



「横浜の動き」 横浜災害ボランティア

ネットワーク会議・総会に参加して

2018年6月17日に開催された、横浜災害ボランティアネットワーク会議の総会に参加しました。当日の参加者は、宇田川会長・港北区社会福祉協議会の遠田さん・石河さんと中島でした。

第一部では、横浜市総務局危機管理室危機対処計画課の石川係長からの「横浜市防災計画『震災対策編』修正について」の説明でした。(計画の詳細は

http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/ki_kikanri/keikaku/shinsai.html

ご確認ください。)

避難行動について「在宅避難」を明記したことが特徴ですが、「任意に自治会が設定する」とされている「いっとき避難所」が避難計画に明記されている点について、参加者から問題意識の表明があり、市としても「市として具体的に指定できるのがBESTであり、今後検討する」との話がありました。自助・共助・公助のなかで、「自助・共助」の部分について、まだ「言葉」「概念」だけが一人歩きしているような、漠然とした危惧を抱きました。また、宇田川会長から「形作り、枠作りは必要だが『人数』は考えているか。今の想定では指定避難場所に1,900名入るような計算になる。」

とはいえ、「車中泊」対応の必要性やNPO等ボランティア団体との関係構築につて課題が記載されるなど、熊本地震など近年の災害を踏まえ

た検討が着実になされていると感じました。

(中島一郎)

横浜市で危機管理を担当する横浜市総務局危機管理室の石川氏から、平成30年1月に修正が行われた横浜市防災計画『震災対策編』について説明を受けました。同計画は、平成26年に発生した熊本地震へ市職員を派遣した経験を反映させているそうです。特に特別避難所(福祉避難所)について、災害廃棄物の処理について、車中泊対策について、ボランティアとの協力体制の4点がポイントだということでした。特にボランティアとの協力体制については、社会福祉協議会の役割としても重要であると感じました。そして災害時には平時より連絡・調整が難しくなることが予想されます。そのため、毎月の災害ボランティア定例会議や立ち上げ訓練などを通し、顔の見える関係づくり、信頼関係の構築に向けて取り組みたいと考えています。また、社会福祉協議会の職員間でも情報を共有し、いざというときに柔軟に対応できるようにしたいと思います。(区社協 遠田哲也)

「全国の動き」 JVOAD 第3回災害時の

連携を考える全国フォーラム

「つながりから協働へ」

災害時の連携を考える全国フォーラムが6月12日、13日の2日に亘って開かれ、全国から行政機関、各種支援団体、大学、社協、災害VCなどが参加、熱心な討論が繰り広げられました。発災時には多くの団体と協同して活動する事が重要です。そのためにも市内、県内、全国の仲間と顔の見える関係を普段から作っておく事が重要です。

今回のフォーラムには小此木防災担当大臣も挨拶に見えました。官民経様々なセクターが協同する動きに積極的に参加する事が発災時の活動を有効に行きます。

泉区災害ボランティア連絡会の江尻さんに感想を頂きました。

大規模災害時の支援活動は、社協が設置する災害VCを通じたもの以上に、NPOなど多様な団体で行われるようになってきている。個々の団体

が個々に活動していく場合、支援にヌケ、オチ、ムラが発生し、単なる「つながり」だけでは解決できない課題も発生してしまう。したがって、各種支援団体相互が情報共有し、活動調整機能が望まれるようになった。

熊本地震、九州北部豪雨による広域連携の体験で、南海トラフ、首都直下大地震が叫ばれている現在、広域的にニーズと支援の過不足調整機能と協働が必要との認識が深まった。

「そういった支援ネットワークとは」をテーマに、JVOAD 始め、先進活動を進めている関係者からの事例発表を基にディスカッションが行われ、今後の展開・方向性について理解を深めた。それには、まず平時から自分の地域の連携・協働を深め、それが市域に、県域に、全国域に、好結果として繋がることではないでしょうか。※神奈川県下では「さくら会議」が開かれ、その機運は出始めていますが、参加メンバーは限定的ですね。

<http://disas.shakyo--iy.or.jp/event/sakura/15/1806.html> (緑区 江尻哲二)

具体的な避難所課題を考え合った分科会資料

ワークシート No.1 (練習問題) カテゴリ:運営

避難所 避難所を運営しているリーダーが男性ばかり。女性用物資を男性が配布している。

考えよう! ① なぜ、これが問題なのでしょう?

考えよう! ② この状態が続くと、どのような問題が起こり得るのでしょうか?

大阪府北部地震から考える

伝わらなかった教訓・伝える難しさ

今年6月18日に発生した大阪府北部地震では震度6弱が記録された地域を中心に住宅被害(主に屋根の被害)とブロック塀倒壊が発生しました。特にブロック塀の危険性は1978年に発生した宮城県沖地震で多数の死者が出た事から、防災関係者の間ではその危険性は知られていたにも関わらず、学校のプールに違法な形で設置されていた塀が倒れ、その学校の児童が

亡くなるという痛ましい事故が起きました。

命に関わる大切な情報が伝わりきっていない、あるいは忘れられて行くという事は残念ながら良くある事です。情報の蓄積と上手な伝達を考えないと、同じ被害を生むのは西日本豪雨災害で再度被害が発生した広島市の方もおっしゃっています。地震被害でも同様です。港北区内でも危険な地域の一覧が発表されています。(横浜市「まちの避難経路」危険ブロック塀等改善事業)しかし先日回ってきた「ブロック塀の安全点検をしましょう」という横浜市の「市民の皆様へのお願い」には専門家への相談先のHPが記載されているだけでした。市民が対策する上で一番気になるのは費用です。その心理を読み取った広報が必要だと思われました。

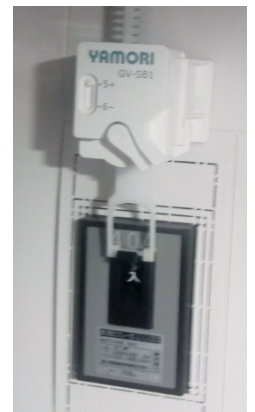
この長さなのに控え壁が無い(区内)



リレー連載 我が家の防災 ⑮

室伏さんちの防災

感震ブレーカーと停電灯の紹介をします。ご存知の方も多いと思いますが、感震ブレーカーは、地震発生時に設定値以上の揺れを感知したときに、電気を自動的に止める器具です。感震ブレーカーは、ブレーカーを切って避難する余裕がないときや不在時に電気火災を防止する有効な手段とされています。上の写真は、我が家の分電盤のブレーカーに設置している、電気工事の



必要ない簡易型バネ式感震ブレーカーです (amazon で 2810 円)。簡易型が不安な方は、電気工事が必要な分電盤タイプもあるそうですが、数万円かかるようです。

大きな地震が発生して感震ブレーカー等が作動した場合、屋内は停電状態になりますので、夜間は避難時の照明の確保が必要です。それに有効なのが停電灯です。停電灯は、停電時非常灯などとも呼ばれ、常時コンセントに挿して充電状態にしておき、停電になると自動点灯する電灯です。点灯したら、コンセントから抜いて懐中電灯として使えます。停電灯があれば、暗闇で懐中電灯を探すなどということをしなくてすむので安全で便利です。我が家には新築時から廊下の足元の壁に停電灯が一つはめ込まれていましたが、入居後、各部屋に追加設置しました。上の写真は各部屋のコンセントに挿してある停電灯です。1 個 2684 円で購入しましたが現在生産終了で、別の製品が出ています。 (室伏俊明)



食の支援に関する意見交換会

—多様なつながりが災害時に機能する—

2018 年 7 月 2 日に今年度 1 回目の「食の支援に関する意見交換会」が開催されました。港北区各地で「こども食堂」や「地域食堂」などに取り組んでおられる皆さんと港北区社会福祉協議会との自由な意見交換の場です。

今回は、新羽ケアプラザで開催している「ダイニング 28」の活動紹介がありました。運営主体は「チームおいもほり」(中心となって活動しているメンバーの方々のお名前のひらがなを拾って組み合わせられたそうです。食堂の運営にぴったりのおしゃれなネーミングだと思いました。)です。現在は 8 名がメンバーで、月 2～3 回のミーティングでメニューや運営の相談をさ

れているそうです。

驚いたのは、昨年度に検討を初めて、今年度 9 月頃から開始のつもりが、なんと 1 月にはスタートしたという準備期間の短さです。「始めよう」となっても、事前の打ち合わせがうまくいかず、なかなか予定通りに開始できない、という話はよく聞きますが 8 ヶ月も前倒ができたという、実行力には賞賛を惜しみません。「おいもほり」の「ほ」である堀さんがいろいろお話していただいたのですが、実に「楽しそう」にお話しされていたのが印象的でした。

「奉仕」をしているのではなく、「食」を通じて地域での繋がり場の提供していることが「楽しくて仕方ない」という前向きなお気持ち伝わってきました。

一方で「助成金が食費に使えず、食材の確保に苦勞している」というお話を聞きました。フードドライブなどの取り組みによる後方支援が大切だと感じました。市や区、社協の助成金には確かに「食費」を除くという規定がありますが、これは「食」の支援活動などがなかった頃の規定だとおもいます。「こども食堂」「地域食堂」は「食事」を提供する取り組みです。そのために「食費」は本来助成対象であるべきだと考えます。ぜひ、関係各位には検討していただきたいとおもいました。奉仕の中身が変われば、行政の規定も変わるべきだと思います。当日「検討します」といっていただいた、高根澤次長のご尽力を期待している中島でした。(中島一郎)

編集後記

☆ 7 月号の失態を取り戻す筈の 8 月号でしたが大変遅れての発行になり酷暑の中冷や汗。(宇田川)

☆ 今日お店で見たら、自動点灯機能が追加された最新の停電灯(保安灯)が 3360 円でした。(室伏)

☆ とても暑かったこの夏。被災地を考えると申し訳ありませんが、自分を守る事がやっとなり、災害関係のビデオを見て過ぎしました。(付岡)

☆ 外気温が皮膚表面の温度より高くなると、膨張した血管が体内の熱を放出せず、逆に外気を取り込んでしまうそうです。体温越えの気温の危険性がここにあります。気をつけましょう。(中島一)

次回定例会 9 月 19 日 10 時～12 時